

Robert Pool 2017 The verification of ethnographic data. *Ethnography* 18(3): 281–286.

ロバート・プール「民族誌的データの検証」

### 問題設定 pp.281–282

・30年前、ジェームズ・クリフォードらは、人類学者が民族誌的テキストの中で写真や逸話を用いたり、自身の解釈が対象の人々にも共有されていることを指摘する自由間接話法を用いたりすることによって、いかに自分たちの権威を構築しているのかを示した。

- 人類学者はめったにデータの本性 (nature) や状態について説明してこなかった。
- これは、単独の民族誌家が離れた場所で、最終的な民族誌を読む可能性が低い人々の間で調査を行うことを考えるならば、驚くべきことである。
- しかしこの状況は変化しており、学術研究における説明責任と監査の文化が民族誌的研究を制限し始めている。

・科学的な研究のデータをアクセス可能で検証可能にしたいという理由は称賛されるべき。

- データを他者にも利用可能にすると、新たにデータを集める手間が省け、結果の検査も可能になり、科学と研究の信頼性にも貢献する。
- 実際、人口サーベイ調査や、疫学調査、診療データなど、多くのデータが収集され、保存されている。

・問い: 民族誌的データは保存され検証の目的のためにアクセス可能にされるべきなのか?

- 問いに答える前に、①民族誌的データとは何であるのか、そして②検証とは何を意味するのか、について議論する。

### ①民族誌データ pp.282–283

・人類学者や他の学問分野の研究者が長期にわたって参与観察を含む民族誌的調査を行う。

- データの集め方は、フォーマルとインフォーマル (詳細は以下) な極の間の連続体として想定することができる。
- 一方で、研究者の中にはフォーマルな技術でデータを集めない人もおり、さらには「収集可能なデータ」という観念を嫌うこともある。こうした民族誌家は、現地の活動に参加したり、コミュニティにたむろしたりして、観察し、聞き、不定期に質問をし、ノートに書く。個人的なスタイルの問題であるときもあるし、フォーマルなやり方が不可能なトピックである時もある。
- 他方で、インタビューやフォーカスグループ、質問紙、写真などの記録可能でフォーマルな技術を多用する研究者もいる。

・民族誌データはインタビューの逐語的な記録、写真やリストの様な他の物理的人工物、民

族誌家の記憶や印象などから構成される。

- 民族誌家は「主観的」で部分的に潜在意識の情報を蓄えてフィールドから戻る。  
→これを主要なデータと考えるが、データとは無関係と見なすかで見解の分岐がある。

・たとえ、そのようなインフォーマルな情報を解釈から除外することが望ましいとしても、フィールドワークへの没頭の経験そのものがフォーマルなデータの解釈の色付けをするので、それは実現不可能である。

- ここで言っているのは、インフォーマルな手段で集められた情報だけではなく、フィールドワークそれ自体の変形的な本性の役割である。
- フィールドワーク以後に出現する民族誌家自体が、それ以前と同じ人ではない。

・民族誌データは、「ハードで客観的」な書類や人工物から、「ソフトで主観的」な記憶や経験まで、広範な存在論的な幅がある。

- 問題は、線引きが難しいということではなく、民族誌的データがハイブリッドであるということだ。
- 逐語の記録も研究者の記憶や経験に依存して再解釈される。最もソフトな記憶や印象も、フィールドレポートの様なテキストになる。

## ②検証の意味 pp.283-285

・データがハードとソフトのハイブリッドなら、アクセス可能性と検証は何を意味するか？

- 書類や録音のような物理的な人工データは保存され検証されるだろう。そして判読可能で(判読不能なフィールドノートもある)、ある程度の解釈可能性を必要とする(例: 山の写真であれば、どこの山なのか特定されている必要がある)。
- このように貯蔵される民族誌データはハードなものに限られるため、ソフトなデータを多用する民族誌家はハードなデータを用いる者に比べて検証に曝されなくなる。

・物理的データの有効性を主張することは、民族誌的な理解に本質的なソフトなデータの正当性を認めないことになる。

- この傾向について、査読誌などで質的研究者に「データ」を引用するように求めるといことが指摘されており、コード化ソフトウェアを用いた引用の選定のための方法的な正当化が予期されている。多くのジャーナルでソフトなデータは伝聞や逸話として拒まれる。

・不正直な民族誌家はデータをでっちあげることもあるので、データを検証のためにアクセス可能にすることは、必ずしも詐欺を防がない。

- 例：著者が、かつてカメルーンでの調査で現地の院生を雇って隣村で並行調査をさせ

た時、彼が後にインタビューのデータを捏造したことが発覚。

- 検証の問題はこれよりも根深い。
  - 病院での意志決定に関する民族誌的研究において、応答者 (respondent) が著者による逐語記録をみてショックを受けた。
  - それは、彼らが言わなかったことが書かれていたからではなく、言ったことが書かれていたから。文字に起こすと当時の印象よりも辛辣な物言いに読めることがある。
- このことは、逐語が最も正確な書き起こしの方法であるのか、という問題を提起する。
  - それは、アーカイブ化と検証と、既存のデータに基づく新しい研究を打ち立てる試みに及ぼす重要性を持つ。
  - アーカイブされたテキストの解釈が、テキストが参加者の多様な視点を通じて判別可能であることを要求する (例えば、アーカイブされえないソフトデータを必要とする) という理由で、アーカイブされたテキストが「本当に」生じた出来事を表象しないとしたらどうだろうか？
- このことは、データが集められる言語行為のジャンルへの潜在的に両義的な関係づけによって、さらに複雑化される。
  - ある人類学者が博士論文のために陶器職人にインタビューをしたが、陶器職人に弟子入りする形で行っていたため、陶器職人にとって、そのやり取りは教育指導だった。
  - もし第三者が、両者のソフトデータを考慮せずに、教育指導として解釈している応答者へのインタビューとして保存され分類された会話を検証しようとするならば、結論が、データが検証テストの役に立たないということになってもおかしくない。
- これらすべてが民族誌的データを検証する試みの無用さを指しているように思える。
  - そうはいても、特にデータの本性という理由で、他の研究者よりも、民族誌家はある種の説明責任に縛られている必要がある。
- ある種の公開レポジトリが目指すところだとは著者は考えない。
  - ハードデータは部分的に個人的で基本的な事実の確認はできるが、ソフトな要素がないと再利用や再解釈は困難。
  - また、情報提供者の個人的な話や親密な話を利用可能にすることには気が進まない。というのも、彼らが著者に委託した時に考えていたものでも、著者が引き出したときに考えていたことでもないからだ。
  - 研究者と応答者の管理を超えた公開ストレージ、検証、および潜在的な再利用という見通しは、データの収集と記録の方法や、機密や危険な問題についての応答者の意欲

に影響を与える。

### 著者の三つの提案 p.285

- ①基本的なファクトチェックのためにリポジトリは必要ない。
  - 物理データは実際に保存しておく必要があり、それを倫理的行動と説明責任の懲戒規範の一部とし、これを行う方法に関する一連の標準的なガイドラインを作成すべき。
  - インタビューの日付と場所、応答者の詳細（可能な場合）の記録は合理的だと著者は考える
  - 書き起こし後は機密性を理由に録音データを破棄するという、一部の倫理委員会の要求を拒否する。
  
- ②民族誌家が、出版物のデータのアクセス可能性、検証可能性、正当性を高めるためにすべきことがある。
  - 規範は多少変化しているものの、民族誌的研究や人類学の博士論文に基づく論文で、フィールドワークの期間やデータ収集に使用された方法の説明がないものが依然としてある。
  - このこと（や、民族誌学者の現地語の習熟度）について語らないことは、データと解釈への信頼を醸成しない。
  
- ③民族誌の中にデータを提示するということもできる。
  - インフォーマントとの語りを型にはめるのではなく、対話自体を民族誌に含める。